

主 題：教会のあるべき姿 : 成長4

聖書箇所：エペソ人への手紙 4章8－10節

今朝、皆さんとともに見たいみことばはエペソ人への手紙4章8節から10節です。ここ数週間に亘って「聖書の教える教会のあるべき姿」、特に、「成長」について私たちは学んでいるのですが、今日も続けてパウロの記したことばからそのことをともに考えていきたいと思えます。今日の内容を見ていく前に、前回学んだことを思い出してみてください。霊的賜物について7節から教え始めたパウロは、そのことに関して、私たちが押さえるべき最も基本的な四つのポイントをその中で挙げていました。

まず、一つ目に見たのは「霊的賜物はすべてのクリスチャンに与えられた」ということでした。救われた者にはみな、主から賜物が与えられている。だからこそ神の家族として生きる者のうちにはだれひとり「私は賜物を持っていない」と言う人はおらず、みながそれぞれに主から与えられたその特別な役割を果たしていく責任を持っているのです。私たちはひとり一人与えられているその賜物を用いて他の兄弟姉妹にはできない特別な方法で、教会の成長に貢献していくことができるのです。

また、二つ目に見たのは「霊的賜物は恵みとして与えられた」ということでした。恵みとして与えられたから、私たちはだれも自分の力や努力で賜物を勝ち取ったわけではないのです。そもそも私たちは主から何かをいただけるような、そんな祝福には値しない存在でした。しかし、そんな私たちに対して主が一方的にあわれみを示し、救いを与え、そして、主に仕えていくためのその力までも与えてくださったのです。恵みによって救われた私たちには恵みによって賜物が与えられ、そして、その恵みの賜物を主と兄弟姉妹に仕えていくために使っていくものとして私たちは今を生かされているのです。

三つ目見たのは「霊的賜物は量りに従って与えられた」ということでした。要するに、主は私たちひとり一人のうちにすべての賜物を与えられたのではなく、それぞれに適切な量だけを分け与えられたということです。だれひとり、すべての賜物を持っている人はいません。私たちは確かにひとり一人を見るとき欠けている者ですが、そのような私たちがともに集うなら足りない部分を補い合うことができるのです。キリストのからだを構成する私たちにはみな、それぞれ違った働きをする様々な器官であり、他の兄弟姉妹たちの働きが必要不可欠なのです。私たちのうちにはだれひとりとして役に立たない人はいないし、必要のない人もいないのです。

そして、四つ目に見たのは「霊的賜物はイエス・キリストによって与えられた」ということでした。私たちに与えられた賜物は偶然にでも適当にでも与えられたものではありません。私たちのことを私たち以上に知ってください、罪も汚れもないイエス・キリストによって、一人ひとりに最善のものとして与えられたのです。だからこそ、私たちの責任は他の人と自分を比べてそれを羨んだりするのではなく、与えられた賜物に感謝して、そして、お互いの間でそれを用いて主のために仕えていくことでした。

さて、こうして霊的賜物について私たち一人ひとりに霊的賜物が与えられたと述べたパウロは、ここで少し話を中断してイエス・キリストの姿について8節から10節で語っています。恐らく、多くの方がエペソ書4章を読んでいて、この8節から10節を見ると混乱してしまうことがあるのです。どうでしょう？皆さん、この箇所を読んだとき、7節と8節から10節のところにはどんなつながりがあるのだろうか？と考えた方はおられませんか？特に、私たちがこの文脈を見ていくなら、7節で一人ひとりに賜物が与えられたと述べたなら、次は11節に飛んで「こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。」と続けた方が文脈の流れとしては自然であるように思えます。どうでしょう？私たちには主によってそれぞれ賜物が与えられた、そして、その賜物にはこんな種類がありますと続けるのが自然な流れだと思えるのです。

でも、パウロはそのようには記しませんでした。その代わりにパウロがここでしたことは、自分の愛するイエス・キリストについて語り始めるのです。でも、よく考えてみれば、まさにこれこそ私たちの思い描くパウロの姿ではありませんか？彼は余りにも主を愛するがゆえに、この主がどれ程すばらしい

お方か、どれだけ偉大なお方か、そのことを霊的賜物に合わせて熱く語らずにはいられなかったのです。彼の心はいつもどんな話をしている時も主に対する思いや賛美で満ち溢れていました。そして、皆さん、これこそが今の私たちが模範にするべき態度だということです。主がどのようなお方なのか？ 私たちも同じように、そのことにいつも目を向けていなければいけないということです。

特に、今私たちは霊的賜物について7節から考え始めたわけですが、どうでしょう、皆さん？「霊的賜物」ということばを聞いたときに、真っ先に私たちの頭の中に思い浮かぶのは何でしょう？ 賜物にはどんな種類があるのだろうか？とそのことをまず考えるでしょうか？ 自分はどんな賜物を持っているのだろうか？とそのことを考えるでしょうか？ それとも、どうすれば自分が持っている賜物を用いて教会で仕えていくことができるのだろうか？と、そういったことを考えるでしょうか？

もちろん、そのように考えることが間違っているわけではありません。そのことは私たちにとってとても大切なことです。でも、私たちがここで覚えないことは、パウロは賜物について、賜物にどんな種類があるのかを11節で考えるよりも前に、まず、賜物を与えてくださったイエス・キリストがどのようなお方なのか、その存在について心を留めたということです。パウロはイエス・キリストが私たちそれぞれに賜物を与えてくださったと、賜物の種類について説明する前に、少し置いて、私の愛する主イエス・キリストについて私たちはよく考えなければいけないと言うのです。いったい、だれによって賜物が与えられたのか、そのことをパウロはよく考えさせようとしたのです。それで私たちががしたいことも同じことです。このパウロのことばから私たちひとり一人に賜物を与えてくださった主がどのようなお方なのか、そのことを今一度ともに考えてみましょう。

そして、その中で皆さんそれぞれに自分自身の心にこのように問いかけてみてください。自分は主から与えられた賜物を喜んで主と兄弟姉妹たちのために用いようとしているのかどうか？ ということです。主の姿を覚えて、そして、そのことで自分自身の心をよく吟味してみてください。特に、これから私たちが見ようとしている8節から10節において、パウロは人々に霊的賜物を与えられたイエス・キリストの四つの姿を記しています。私たちがいつも心に留めておくべき四つの主の姿です。どのような姿をパウロが描いていたのか？ いつものようにまずみことば読んでそのことを考えていきましょう。

4：7—10「7 しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。8 そこで、こう言われています。「高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、人々に賜物を分け与えられた。」9—この「上られた」ということばは、彼がまず地の低い所に下られた、ということではなくて何でしょう。10 この下られた方自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです——」

☆霊的賜物を与えてくださったイエス・キリストの四つの姿

1. キリストは勝利者として天に上られたお方 8 a 節

8節「そこで、こう言われています。「高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、…」」、ここでパウロは先ほど読んだ詩篇68篇の特に18節のみことばを引用しているのですが、霊的賜物について語っていたパウロはなぜこの箇所を用いたのでしょうか？ いったい、何の意図をもって彼はここでこの詩篇のことばを用いたのでしょうか？ そのことをより理解するために詩篇68篇をともに考えてみましょう。詳しいことはまた詩篇を一つひとつ見ていくときに考えるとして、この68篇を大きくまとめるなら、ここには「戦いに勝利される神の姿」が描かれています。圧倒的な力で敵を打ち負かすそんな偉大な力を持った主の姿がここに記されているのです。1—3節ではその神に対するダビデの祈りで始まっています。「1 神よ。立ち上がってください。神の敵は、散りうせよ。神を憎む者どもは御前から逃げ去れ。2 煙が追い払われるように彼らを追い払ってください。悪者どもは火の前で溶け去るろうのように、神の御前から滅びうせよ。3 しかし、正しい者たちは喜び、神の御前で、こおどりせよ。喜びをもって楽しめ。」、このようにしてダビデはご自分の主がどのようなお方なのか、何よりも敵を打ち負かされる神だと知っていたからこそ、このように祈ったのです。

少し飛んで19—21節を見ると「19 ほむべきかな。日々、私たちのために、重荷をになわれる主。私たちの救いであられる神。セラ20 神は私たちにとって救いの神。死を免れるのは、私の主、神による。21 神は必ず敵の頭を打ち砕かれる。おのれの罪過のうちを歩む者の毛深い脳天を。」、こうして私たちがここに見ることができるのは、ダビデは繰り返して神がご自分の敵に必ず勝利されるお方であること、同時に、こ

の方を愛してこの方のうちに身をゆだねる者には救いが与えられると、そのことを教えていたのです。この方に身をゆだねる者は勝利されるその主とともに同じ勝利を喜ぶことができると、ダビデは繰り返し教えていたのです。この方に齒向かうことができるような敵は一切いないということ、すべての敵の頭を打ち砕かれるような偉大な勝利者、救いの神であるとそのことが教えられていたのです。その姿がここに描写されているのです。

そして、このような文脈の中で記された箇所が今日のテキストに引用されている18節です。「:18 あなたは、いと高き所に上り、捕らわれた者を取りこにし、人々から、みつぎを受けられました。頑迷な者どもからさえも。神であられる主が、そこに住まわれるために。」と、さっと読むと何を言っているのかよく分からないかも知れませんが、ダビデはここで何を言わんとしたのでしょうか？そのことについて様々な考え方があります。但し、皆さんに一つははっきりと言えることは、ここで言われていることと表されている描写は、すべての敵に勝利された偉大な神が「いと高き所」であるシナイ山に上り、そこに住まわれたということ、その姿を表しているということです。

また、それに加えて皆さん、その後「捕らわれた者を取りこにし、」ということばも記されています。少しややこしいかもしれませんが、これは当時の習慣を考えるなら何となく言いたいことは分かります。この当時の習慣として、戦いに勝利した王は、自分が戦いに勝利したということ、そして、征服した敵が自分の支配下にあるということ、そのことを公にするために、捕まえた敵を捕虜として引き連れていたのです。自分が戦いを制したことを公にするために敵を捕虜として自身の都へと引き連れて凱旋したのです。帰還したのです。その時に王は捕虜だけでなく、敵から勝ち取った数多くの戦利品や貢ぎ物などもともに携えていました。何となく想像できますね。勝利した王が敵を捕虜としながら様々な貢ぎ物や戦利品を携えて自分の都へと帰っていくのです。そして、民といっしょに喜びを分かち合うのです。唯一勝利した王だけがそのように振る舞う権威を持っていたのです。

この背景をこの描写を覚えた上でエペソ書のみことばに戻ってください。パウロがこの8節で詩篇のみことばを引用して何を言わんとしたのか？このように言えます。キリストは高いところに上られたとき多くの捕虜を引き連れてそこに上られた。つまり、キリストこそがすべての敵を打ち負かし、高く天に上げられたお方、すべてに勝る勝利者だ、キリストこそがすべての敵を打ち負かし、そして、天に高く上げられた勝利者だということです。そして、あらゆる敵に勝利した私たちの主は、その勝利を公にするために打ち負かした敵を捕虜として引き連れて、そして、天に凱旋されたのです。

そのことはコロサイ書の中にも分かり易く記されています。コロサイ2：15「神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。」と。私たちの主はすべての敵に勝利し高く上げられたお方である。皆さん、私たちの主は勝利者だと、パウロはそう言うのです。この方は罪に対して勝利し、罪の罰である死に対して勝利し、そして、サタンに対しても勝利された、そんなお方だ。あの十字架と復活のわざを通してすべての敵を完全に打ち負かし、すべてのものをご自身の支配下に置かれたのです。だからこそ、このようにして主が勝利者であるからこそ、私たちはこの主のうちに救いを、また、この主のうちに勝利を見出すことができるのです。

ここで私たちが絶対に忘れてはならないことがあります。そのことを考えるためにエペソ書の2章を見てください。2：1-2は私たちもよく知っている箇所ですが、このように書かれています。「:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、:2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。」と、パウロは生まれながらの私たちの姿を描写しています。私たちの生まれながらの姿は「自分の罪過と罪との中に死んでいた」、サタンの支配の中に捕らわれていたと、パウロはそのことを教えているわけです。

皆さん、私たちが自分自身のことを考えるときに、私たちは生まれながらに罪や間違いといったものをときに犯すような、そのような者であったのではありません。生まれながらの私たちは実は良い人でたまに正しいことをすることができる、そんな力を持っていたわけでもありません。聖書がはっきりと私たちに教えていることは、私たちはみな罪の中に罪の力の中に捕らわれていたということです。私たちはサタンを主人として生きるそんな罪の奴隷として生きていたのです。だからこそ、暗闇の中をさま

よっているゆえに真理をどれ程を示されようがそれに目を向けることも出来なかったのです。だからこそ、私たちはだれ一人として聖い神に従おうとも思わなかったのです。罪の中に死んでいた私たちはだれ一人として自分の力でその状況を改善することなどできなかったのです。

皆さん、なぜだか分かりますか？なぜ、私たちは自分の力でどうすることもできなかったのでしょうか？それは私たちにはどうすることもできない力に支配され捕らえられていたからです。私たちは私たちではどうすることもできない罪の力によって死の力によってサタンによって捕らえられていたのです。だからこそ、私たちには自分にはどうすることもできないその力を打ち破り、そして、その状態から救い出してくれるそんな助け主が必要だったのです。そして、私たちを支配するその力、その支配を打ち破ってくださった勝利者こそがイエス・キリストだったのです。

イエスは勝利者です。イエスは本来私たちが受けるべき罪の罰を代わりに受け十字架にかかってくれました。そして、ご自分が言われていた通りに三日目に墓から復活して、さらに勝利者として天に上っていかれたのです。ですから、パウロは同じエペソ 1 : 20 - 21 でこのように記しています。「:20 神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、:21 すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。」と。私たちの愛する主はすべての敵に勝利された。私たちにはどうしようもできなかったその力にその罪の支配にその死の力にすべて勝利されたのだ。そして、それによってこの世界のすべて、その支配も権威も権力も主権も、また、すべてのものに勝る名が高く上げられた神の右の座にあって与えられたと言うのです。

このような勝利者が今神の右の座に着かれています。この世のすべてのものがこの勝利者の支配下にあるのです。勝利された方はすべてのものを所有しているのです。確かに、私たちが周りを見渡してみると、そこにはサタンの働き悪霊の働きが実際にそこにあります。しかし、そんな彼らも好き勝手に働きを為すことができているわけではありません。彼らもすべてこの勝利者である主の下にあるのです。この主の支配下にあるのです。そして、支配下にあるからこそ来たる日には主によって彼らは火と硫黄の池に投げ込まれていくのです。なぜ主はそんなことができるのか？それは主が勝利された王だからです。王だからそのような権利を持っているのです。

皆さん、私たちはこんな主によって救われたのです。このような勝利者である主によって私たちは今同じ勝利者として生きていくこと、そのことが良しとされたのです。パウロはコリント人への手紙の中でもこのように言っています。Ⅱコリント 2 : 14 「しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。」と。私たちは勝利者とともに生きる者とされたのです。それなら皆さん、主にあって私たちもすでに勝利の行列に加えられているのであれば、私たちはその勝利を心から感謝してそれにふさわしい証を立てていくことです。勝利者として日々を生きていくことです。確かに、私たちの生活において、ある時は罪の誘惑が私たちを襲うことがあります。その誘惑は余りにも大きく感じて罪に負けてしまいそうになることもあります。そんな時どうするか？その時には次のことを覚えることです。

かつての私たちは確かに罪に捕らえられ罪の奴隷として生きていました。しかし、今はもうキリストにあって義の奴隷として生きる者へと変えられたのです。罪の力に対してもうすでに勝利されたその主にあって私たちも今そのような誘惑や罪に対して勝利していくことができるのです。また、ある時は私たちは様々な試練や様々な戦い、苦しみの状況に置かれることによって不安や恐れ、悲しみなどが心を支配してしまいそうになることもあるかもしれません。そんな時はどうするか？その時も覚えることです。パウロはこのように言いました。ローマ 8 : 37 「しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。」、パウロはよく分かっていました。たとえ、どんな困難があったとしてもどんな苦しみがあったとしてもどんな迫害を経験していたとしても、いのちを狙われるような危険があったとしても、パウロは主にあって勝利者として生きていける、圧倒的な勝利者として生きていけると、その希望と確信を持っていたのです。

そして、この同じ主が皆さん今日私たちとともに歩んでくださっているのです。この同じ主によって私たちは救い出されたのです。それなら、私たちはそのことを感謝して生きていくことです。そし

て、何より皆さんこのような勝利者であるこの主が、高く上げられた私たちの勝利者である主が、私たちに賜物を与えてくださいました。私たちはこの賜物を互いの間で用いることによって、主の教会を建て上げていくのです。同じ主を愛する者として賜物を分かち合うことによって、喜びを分かち合っていくこともできるのです。皆さん、私たちの賜物はこのようなお方によって与えられているのです。私たちの主はすべてに勝利して天に上り、今神の右の座に着かれています。このような勝利者である主が私たちに賜物を与えてくださったのです。このことを覚えて、この方を覚えて私たちは生きていくのです。

2. キリストは人々に賜物を分け与えたお方 8 b 節

次に見るイエス・キリストの姿は「人々に賜物分け与えられたお方」ということです。パウロは8節の続きにこのように言っています。「…人々に賜物を分け与えられた。」と。勝利された主は私たちに救いを与えてくださるだけでなく、この方において私たちがこの主のために生きていくために仕えていくために必要なその恵みの賜物を与えてくださったということです。皆さん、この8節の最後を見てある人はもう気付かれているかもしれません。どうですか、皆さん？そうですね。このエペソ4：8の最後のことばと、先ほど見た詩篇68：18のことばを見比べると、そこには違いがあります。エペソでは「人々に賜物を分け与えられた。」となっていて、詩篇では「人々から、みつぎを受けられました。」となっています。「分け与えられた。」と「受けられました。」という、一見すると正反対であると思えることばが使われています。このような違いを見て、聖書を攻撃しようとする人、聖書の無謬性を否定しようとする人はこの箇所をとってパウロは間違っただけで引用したのだ、聖書には間違いがあると、そのように疑ったりするのです。皆さんはどうでしょう？果たしてそうなのでしょう？パウロは間違っただけなのでしょう？答えはもちろんノーですね。パウロは意図的にこのようにしているのです。

では、どのような意図があったのでしょうか？そのことを理解する上でも、先ほど皆さんと一っしょに考えた背景が大いに役に立ちます。戦いに勝利した王の姿です。その王は捕虜として捕らえた敵といっしょに彼らから勝ち取った戦利品や貢ぎ物を携えて自分の都へと帰還して行きます。それがその当時の習慣だったのです。敵から勝ち取った戦利品をもって自分の町に凱旋したときに、王は民とともに勝利を喜び、手に入れた戦利品を彼の部下たちに分け与えることがあったのです。王は戦利品を自分のものとする権利も、また、人々に分け与える権利も持っていたのです。それが勝利者である王だけに与えられていた特権でした。皆さん、そのことを覚えてその姿を覚えてこの8節の最後のことばを見ると、パウロが言わんとしたことが何かがよく分かるのではないかと思います。

すべての敵に勝利されたイエスはみつぎを受けることも、また、人々に賜物として分け与えることもできるということです。あわれみ深い主はそのあわれみをもって、本来そのような者には値しなかった私たちに賜物のギフトを分け与えることができるお方なのです。実際にそのようにして私たちに霊的賜物を与えてくださったのです。この「分け与えた」ということばと「受けられた」ということばとの違いに関して、ペテロが分かり易く教えてくれていますからその箇所を見ましょう。使徒の働き2：32、33「:32 神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。:33 ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。」、イエスは「御父から約束された聖霊を受けて、…この聖霊をお注ぎになったのです。」と。こうして主は恵みによって人々が主のために生きていくのに必要な助け主を与えられたのです。だから、このことを覚えるときに、みつぎを受けることと賜物を分け与えるということは決して矛盾することではなく、どちらも一貫した行為だということです。受けたものを与えるわけです。

そして、私たちにはそのようにして主から霊的賜物が与えられているのです。だから皆さん、そのことを私たちが覚えるときに、私たちはいくつかのことをよく考えることができます。それは、私たちに賜物が与えられているということは主が勝利されたということです。主が勝利されたからこそ私たちに賜物が与えられているのです。勝利者である主が私たちの上に恵みを注いでくださったからこそ私たちは賜物を持っているわけです。ですから皆さん、私たちが賜物について考える時、私たちが覚えるべきことは勝利された私たちの主は恵みによって私たちに賜物を与えてくださったということです。私たちが自分自身の賜物を覚えるときに、これは何も適当に与えられたものではなく、勝利して天に高く上られて神の右の座に着かれています主が最善のものとして 与えてくださったもの、恵みとして与えてくださ

ったものです。私たちはこの方を覚えて生きていくことです。

3. キリストはへりくだって人となり苦しまれたお方 9節

続いて9節で、霊的賜物を与えてくださったイエス・キリストの三つ目の姿は「へりくだって人となり苦しまれたお方」と見ることが出来ます。9節に「——この「上られた」ということばは、彼がまず地の低い所に下られた、ということではなくて何でしょう。」と記されています。パウロが言わんとしたことをまとめるなら、彼はエペソの兄弟姉妹たちに向かってこのように言うのです。「皆さん、私たちはこれまで勝利された主が天に上られたということについて考えて来ましたが、それは私たちにとって何よりもすばらしくて感謝なことです。でも、ここで皆さん少し考えてみてください。主が天に上られたということ、それは言い換えれば主がまず地の低い所に降られたということです。私たちの主はまず地上に来られ、そしてその後、神の右の座へ上っていかれたお方です。」と。パウロは主が天に上られたということがいかにすばらしいことがよく分かっていました。そのことについて8節に記したのです。

しかし、それと同時に、そもそも主が天に上る前に地の低い所に降られたということも同じように大切なことだと、エペソの人たちに教えているのです。この4：8－10は様々に難しいところがあります。その一つは「地の低い所に下られた、」ということばです。これはいったい何のことか？と。様々な解釈が人々の中にあるのです。例えば、ある人たちはこの箇所をとって天に上られる前の主は地上よりもさらに低い所、ハデス＝地獄へ降られたのだと、そのような考えをしている人もいます。その様々な考え方をここで詳しく見ていては時間がなくなってしまうので、今日は少なくともこのことばが他の聖書箇所ではどのように使われているのか？そのことを皆さんといっしょに見てみましょう。このことばは他の箇所にも使われています。その使われ方を見るなら、パウロがここで言わんとしていたこと、パウロがなぜ地の低い所と言ったのか、そのことをよく考えることができると思います。

旧約聖書の中から三箇所はその例を見てみましょう。

詩篇 63：9－10 「：9 しかし、私のいのちを求める者らは滅んでしまい、地の深い所に行くでしょう。：10 彼らは、剣の力に渡され、きつねのえじきとなるのです。」、ここにある「地の深い所」とは何を表しているのでしょうか？「私のいのちを求める者らは滅んでしまい、地の深い所に行く」とありますから、これは「死」を意味しています。そのことをより分かり易く示しているのが10節です。「彼らは、剣の力に渡され、きつねのえじきとなるのです。」、ダビデのいのちを狙っていた敵はみな剣によって滅んで、地の深い所へと下っていくと、つまり、死んでしまうと言っているのです。そのことを教えています。

詩篇 71：20 「あなたは私を多くの苦しみと悩みとに、合わせなさいましたが、私を再び生き返らせ、地の深みから、再び私を引き上げてくださいます。」、皆さんここで使われている「地の深み」は何を意味しているのでしょうか？何を表しているのでしょうか？ここで著者が言ったことは「死」ではありません。ここで言われていることはこの著者が抱えていた「酷い苦しみ」のことです。そのことを「地の深み」ということばで表現していたのです。彼は自分が直面している様々な悩みや痛み、酷い苦しみ、それらから主が自分を再び救い出してくださること、そのことを期待していました。

詩篇 139：15－16 「：15 私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。：16 あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。」、**「地の深い所で」とあります。16節に説明されています。ここで使われている「地の深い所で」というのは子どもが生まれる前の母親の子宮のことを言っているのです。人として生まれる前のその母親の子宮のことです。**

これらの三つの箇所をまとめるなら、「地の低い所」「地の深い所」「地の深み」は「死」であり、「酷い苦しみ」「人として生まれる」ということを意味していると取ることが出来ます。そのことを覚えて9節を見てください。「彼がまず地の低い所に下られた、」とは、勝利して天に上られる前の主は、人としてこの地上に来られ、そして、酷い苦しみをし、最後には、死を経験されたということです。最も輝かしい栄光を受けて天に上られる主は、最もへりくだってまさに十字架の死にまでも従われたのです。このことに関して、パウロはピリピ書の中で私たちにとって最も分かり易い形でこのように記しています。ピリピ2：6－8「：6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、：7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、：8 自分

を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」、

皆さん、私たちがこの主を覚えるときに、主がどのような形でご自分をへりくだらせ、そして、この地上に来られたのかということを知るべきです。キリストは偉大な力を持った神です。この神はすべての権威を持っているお方です。このキリストはその栄光を輝かせて地上に降りて来て、主に逆らうすべてのものを一瞬にして滅ぼすことができる、そんな力を持ったお方です。そんな権威を持っておられるのです。でも、そんな主が神のあり方を捨てられないとは考えずに、人に仕える者としてこの地上に来られました。ご自分を卑しくし、実に、十字架の死にまでも従われたのです。

皆さんこのことをよく考えてみてください。パウロの次のことばもよく考えてみてください。ガラテヤ3：13「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたものである」と書いてあるからです。」、神の御子が「私たちのためにのろわれたものとなって」と…。先に見たことを思い出してください。キリストは高く上げられたのです。そんなすばらしい輝かしい栄光を受けるに値するお方です。でも、その神の御子が私たちのためにのろわれたものになってくださったのです。本来、受ける必要など一切ないその酷い苦しみや恥を受けて私たちのために血を流してくださったのです。いったい、この主はどれ程の犠牲を払われたのでしょうか？いったい、どれ程ご自分をへりくだらされたのでしょうか？

でも皆さん、ここで話は終わったわけではありませんでした。主は十字架の上で死に墓に葬られてそれで終わりではありませんでした。先ほど見たピリピ書の続きでパウロはこう言っています。ピリピ2：9-11「:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」と。ご自身をへりくだらせて大きな犠牲を払い、私たちに仕えるためにこの地上に来られた。その死からよみがえって勝利者として天に上げられ、そして、すべての名にまさる名がこの方には与えられました。

皆さん、こんなお方によって私たちに今日賜物が与えられているのです。このような犠牲のもとに私たちに賜物が与えられているのです。それなら皆さん、主が勝利者として高く上げられたということを理解するだけでなく、同時に、この主が地の低いところに降られたということを知るべきです。私たちがのろわれたときに、私たちは主と人とのためにより犠牲を払って生きていきたいと、そうならないでしょうか？皆さん、私たちが賜物を用いて他の兄弟姉妹に仕えていこうとするときに、そこにはいつも大きな葛藤があります。それは私たちが自分を捨てて犠牲を払って相手に仕えていくかどうか？ということなのです。

考えてみてください。私たちが互いの間で争いや不一致、不満というものを持つときに、そのような思いを抱くときに、私たちがのろわれたときにはどんな思いや態度があるのでしょうか？そこには何かしらの自分というものがある私たちがそれにしがみついているのです。私たちの模範であるこの主は最も輝かしい栄光を受けるのにふさわしいお方でした。しかし、それにも拘わらず、それを捨てて人に仕えるために地上に来られたわけなのです。主は自分のことを考えたのではなく私たちのことを考えてくださいました。そして、この主がへりくだって私たちのために自ら進んで犠牲を払ってくださったからこそ、私たちは今を生かされているのです。

今、私たちは希望と喜びを持って生きていくことができるのです。それなら、私たちの責任はこの主の払われた犠牲を覚えて、そして、互いの間で犠牲を払って仕え合っていくことです。主が為してくださったように自分を捨てて、そして、仕え合っていくことによって、そこにのみ一致は保たれていきます。皆さん、どれだけ主が高く上げられたお方か、そして、どれだけ主は自分を低くされたのか、そのことをよく覚えてください。

また、今日このメッセージを聞かれた皆さんの中に、もしまだイエス・キリストご自分の救い主として受け入れていない方がおられるなら、どうか、今日これまでに聞いて来たことをよく考えてみてください。これほどまでに犠牲を払ってあなたのために死んでくださったこの主の救いを、もしあなたが拒み続けるのであれば、そんなあなたに残されているものはただ主の燃える火のさばきだけです。主は本

来私たち自身が受けるべき罪の罰を代わりに受けて十字架の上で死んでくださいました。私のために主はもうすでにこれほどまでに大きな愛を大きな犠牲を払ってくださったのです。そして、愛を示してくださったのです。ですから、どうかこの主に背を向けて罪の中を歩み続けるその生き方を止めてください。救いを自ら拒んで滅びへと進んで行かないでください。この主が成してくださったことを自分には関係ないことだとそう聞き逃さないでください。必ず、それぞれが主の前に立つ日はやって来ます。その時、知らなかったという言い訳ができるものは一人もいません。主の愛はもうあの十字架の上に標されたのです。その上に明らかにされたのです。ですから、どうか今日この救いの主イエス・キリストを自分の主として受け入れて悔い改めて、そして、この方のために新しい人生を始めてください。

私たちの主はすべてに勝利して、天に上り神の右の座に着かれたお方です。しかし同時に、この方は仕える者として自らへりくだりこの地上に来られました。このような方によって皆さん私たちに賜物が与えられているのです。この方を覚えて私たちは生きていくことです。

4. キリストはすべてのものを満たす主権者であるお方 10節

そして最後に、霊的賜物与えてくださったイエス・キリストに関して私たちが覚えるべき四つ目の姿は「この主がすべてのものを満たす主権者であるお方」だということです。時間がないので簡潔に見ますが、10節には「この下られた方自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです」とあります。今、高く上げられた私たちの主は神の右の座に着かれ、そして、この世界のすべてを支配しておられます。この方はすべてのものの上に立つ主の主、王の王として君臨されているのです。そして、そんなお方が私たちのすべてを満たそうとしてくださっているのです。私たちに救いを与えてくださり、私たちが主に仕えていくのに必要なその恵みの力を与えてくださり、霊的賜物を与えてくださり、そして、日々私たちが覚える必要さえも満たそうとしてくださっていると言うのです。私たちが恵みによって救い出してくださったお方は、変わらずに恵みを注いでくださっているのです。

皆さん、私たちはこのような方によって賜物が与えられています。私たちは主から与えられた賜物を喜んで主と兄弟たちのために用いようとしているのでしょうか？私たちの主はすべてのことにすべての敵に勝利して天に高く上げられました。そして、それで終わりではなく、私たちのすべてを続けて満たそうとしてくださっているのです。この方を私たちは覚えて今日を生きていくことです。

まとめ さて、今朝、私たちは霊的賜物を私たちに与えてくださったイエス・キリストの姿について改めて考えました。皆さん、どうだったでしょうか？私たちの主は自らへりくだって人に仕え、そして、十字架の死にまでも従うためにこの地上に降って来られました。でも、それだけではなくこの方はご自分が成し遂げられたその救いのみわざによってすべての敵を打ち負かし、そして勝利者として天に高く上げられたのです。そして、今なお神の右の座に着いてすべてのことを支配しておられるお方です。こんなあわれみ深い主によって私たちは同じ一つの神の家族、キリストのからだに属するものにされました。こんな偉大な主によって、私たちはひとり一人その量りに従ってキリストの賜物が与えられているのです。

皆さん、それなら、私たちの責任はこの主を覚えてこの方に忠実に従っていくことです。与えられた賜物を私たちは感謝して、それを主と兄弟姉妹たちのために用いていくことです。そのために勝利された主は私たちに霊的賜物を与えてくださいました。それぞれが互いに仕え合って、そして、キリストのからだを建て上げ続けていくために…。皆さん、自分の思いであったり、周りの状況に目を奪われるのではなく、どんなときもこの主に心を留め続けることです。兄弟姉妹に仕える時も同じです。だれであろうが、どんなときであろうが、私たちは主が模範を示してくださったように自分を捨て、そして、仕えていくことです。私たちは今も生きておられるこの主にあって一つのものとしてされました。

そして、何よりもこの方がまた再び帰って来られるのです。私たちはその希望を持っているのです。ですから、私たちのために大きな犠牲を払われたこの勝利者をいつも覚えて、そして、この方に喜んで仕える者として私たちは益々主に喜ばれる者として、また、教会として成長していきましょう。